

城北橋教会小教区だより

みこころ

「週の初めの日」 プリヨ・スサント神父

「キリストが復活しなかったのなら、
あなたがたの信仰はむなしい」

ヘルマス・アスンビ助祭

Sr.林が城北橋教会の信者の皆さんにインタビュー 第3回

「これはわたしの愛する子、私の心に適う者」

(城北橋教会の新成人の皆さん)

信徒寄稿 他

第9号 復活祭号

2008. 3. 23.

発行元：カトリック城北橋教会

〒462-0847 名古屋市北区金城1-1-57

Tel (052)912-7123 Fax(052)917-0018

(HP)<http://johokubashi.mikokoro.net/>

「週の初めの日」

主任司祭 プリオ・スサント神父

皆さん、主の御復活おめでとう
ございます。

「週の初めの日、朝早く、まだ
暗いうちに、マグダラのマリアは
墓に行った」(ヨハネ二十：一)。

この福音の言葉に私たちは、死
の世界の「雰囲気」を認識させら
れます。それ以上なのかもしれま
せん。この言葉に私たちは死の世
界に触れるかのような、死の世界
に引きこめられるような感じがし
ます。暗いうち、静けさのなか、
一人の女性、恐怖感に押しつづら
れそうにおびえながらも墓の方へ
進んでいきました。

この静けさ、恐怖、暗黒は長続
きしませんでした。いきなり、す
べては変わりました。マグダラの
マリアは、墓は空になったことを
見つけ、シモン・ペトロのところ
へ走って——シモン・ペトロと
もう一人の弟子は墓へ走って——

もうひとりの方が先に墓に
ついて——。誰もが驚きました。
この週の初めの日に、いのちが死
に打ち勝ちました。神様が介入し、
墓を開けられました。

けれども、この死の世界の「雰
囲気」は、今現代にも人々を支配
するかに感じてなりません。
世を支配する権限の争い、宗教間
の真理に対する権限の争い、あら
ゆる差別、あらゆるテロの悪循環。
資源の争い、不正義、自然破壊、
これらの問題がいのちの力を根こ
そぎにして脅かすかのように見え
て、追い詰められた人々は生き場
を奪われ、無力にされて生きる希
望の喜びを失い、悪の力に立ち向
かうことができなくなるように見
えます。このような落胆と失望と
キリストの復活の信仰とが両立す
ることができるのでしょうか。

すでに、復活の日の朝方から神
がキリストの復活によって社会的

な革命を始められました。当時の
ユダヤ人社会で奴隷と同じく差別
を受けた女性を通して神が死に対
するいのちの勝利を宣言されまし
た。

二人の弟子が登場したのは、マ
グダラのマリアが墓は空になった
ことを確認した後でした。ひとり
はシモン・ペトロでしたが、もう
ひとりの弟子の名前は書かれてい
ませんでした。このもうひとりの
弟子はヨハネ自身でしょうが、何
かここに象徴的な意味があるよう
な気がします。ヨハネによる福音
の中では彼はペトロより先にイエ
スの弟子になりました(ヨハネ一・
三五―四〇)。

彼は、ペトロと違って、弟子た
ちの間に誰が裏切り者なのかを知
っていたようでした(ヨハネ十三
・二三―二六)。彼は、十字架の
そばまでずっとイエスに従って離
れませんでした(ヨハネ十九・二
五―二七)。ペトロは、イエスを
知ることを否定しましたし(ヨハ
ネ十八・一五―二七)、十字架の
そばにもきませんでした。

そして、今日の箇所では、ペト
ロがもうひとりの弟子に肉体的に
も霊性的にも勝てないことがべ
られていきます。もうひとりの弟子
は先に墓について、「入ってきて、
見て信じた」。同じ光景、同じも
のを見たペトロはまだ信じるに至
りませんでした。

この二人の弟子の態度、つまり、
空になったイエスの墓の前の態度
は、よく現代にも見られると思っ
ます。一方、自分(のいのち)を
与えると言う行為はむなしく、自
分の滅びとしか考えられない人も
いれば、他方、イエスのように、
自分(のいのち)を人のために与
えると言う行為は滅びに続くので
はなく、神の豊かないのちに至る
のだと信じて生きる人も少なくな
いのです。

わたしたちはどんな立場あるい
は生き方を取るのでしょうか。



『キリストが復活しなかったのなら、 あなたがたの信仰はむなし』

ヘルマス・アスンビ 助祭

復活祭は教会の一番大きな祝日だと言われている。毎年、全世界のキリスト者はこの信仰のお祝いを喜んでむかえると思う。私たちがカトリック信者たちも準備として四十日間の四旬節を通して、断食などを進んで行ったり、回心したりし、四旬節が終わると、復活祭が厳粛に行われる。

私は色々な所での復活祭を体験してきた。子どもの頃、自分の村（ヌリオン）の人々と一緒に復活祭をお祝いした。村の人々は九九・八%がカトリック信者だから、復活祭はとても厳粛だった。聖木曜日から復活祭の日曜日まで村の人たちは、皆、仕事を休み、教会でのミサあるいはお祈りに参加していた。その前準備として、グループで積極的に教会を飾ったり、教会の庭を綺麗にしたり、聖歌の練習をしたりした。賑やかでひとつの家族だとよく感じた。

西バプアへ行つたとき、違う雰囲気にとけ込んだ。メラウケ市からミンディプターナまで行って、神学生として内地の人々と一緒に復活祭を過ごした。大雨の中でひどくぬかるんでいる道を渡っても、根気よく待つてくれる信者さんたちに合ったとき、その疲労が完全になくなったような気がした。シンプルな現地の人たちが自分の言葉で熱心に祈ったり、喜んで聖歌を歌いながらキリストの復活の内に喜び合ったりしたことが素晴らしく感じた。やはり、神様は遠くに住んでいる人々にも救いの光を照らしてくださった。そのために、その人たちもキリストの復活の恵み、愛と喜びを味わうことができたのだ。

ジャワ島のクトアルジョでも違う状態を体験した。毎年、復活を祝うために、特別な委員会を作ることになっている。復活のお祝い

の予定、行いと評価はこの委員会の責任だそうだ。そこにいた時、この委員会のお陰で、復活祭のお祝いが厳粛で本当にうまくできて、よく準備された復活祭だった。

今年、日本で三番目の復活祭だ。昔、長い間迫害されて、強い信仰を受け継ぐ日本人と共にキリストの復活を祝う機会があることを心から感謝している。

この世の中で多くの人々が熱心にキリストの復活を祝っている。地域と文化によって、雰囲気が違うと思うが、どこでも、このようなメッセージが伝えられる。復活されたキリストにおいて、救いの恵みをわたしたちが頂いたことなのだ。キリストの復活において、わたしたちの救いを保証された。

聖パウロはコリントの信徒への手紙でこう書いている。「――キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなし、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。――」毎年、復活のお祝いを行うたびに、この御言葉を思い出す。これはわたし

にとつて大きな慰めだ。ご復活において、イエス様がすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、すべての敵を御自分の足の下に置かれた。さらに、最後の敵として、死が滅ぼされた。従って、復活されたキリストに属している私たちの信仰はむなしでなくて、それによって救いの恵みを頂いている。

今まで、イエス・キリストの僕、宣教師となるために、私は神学生として長い年月の準備を頑張つてしてきた。ご復活祭を祝うと、大きな力の恵みを頂く。なぜかと言うと、キリストのご復活によって、偉大な業をしてくださったまことの神を信じて伝える者は嘘つきではないと知っているからだ。聖パウロが書いているとおり、「そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。」キリストは復活された。

アレルヤ!

天国の相馬司教様に 心からの感謝と愛をこめて

マリア・クララ 朝見 鈴子

今から約二千年前イエス様は、飢えた人々、渴いた人々、病人、牢にいる人々の友となられました。そのイエス様を私たちはキリスト様とお呼びし、主として従っています。

故アロイジオ相馬司教様は、小さくされた人々、特にホームレスの人々、体の不自由な人々、アルコール依存症の人々、韓国、フィリピン、ベトナム、東チモールの人々と、共に生き、生活・人権・生命の回復に努められました。この尊い足跡を記念し、司教様と同じように、日々草の根として、小さくされた人々と、共に生き、正義と平和の実現に尽力されている人々を、表彰し応援するために、二〇〇五年十月六日にアロイジオ賞が創設されました。

今年も六月の第三日曜日に、相馬司教様を記念する行事の席で、三回目の表彰をします。人々のために働いて下さっている団体、個

人を推薦してくださいますようお願い致します。

八十一歳で天国に召された相馬司教様は、本当に愛のある司教様でした。多くの人々を助けるために、色々な足跡を残してくださいました。

七五年十二月二十三日の夜、司教様と、皆様で名古屋駅地下鉄構内の現場に行きました。まだホームレスという言葉も、あまり知られていない時代でした。コンクリートの路上で凍てつく寒風の下で生活をしている人々が心配で、毎日おにぎりを作り、衣類などを持参しましたが、私は家にお連れすることも出来なくて、非力と限界を痛感しながら、神様に泣きながら、小さい人々をお守りくださいと、祈ることしか出来ませんでした。でも、苦しい時もありましたが、食事の援助の必要性を痛感しておにぎりを作り、人々が心配で駅に届けに行きました。

炊き出しの時、司教様はホーム

レスの人々が零したごみを箒で掃いてくださったり、深夜パトロールにも、ご一緒してくださいました。素晴らしい司教様でした。私は、そんな司教様に従って、炊き出し活動や、マツクの資金作りのための、バザーやチャリティーコンサートの券を売ったり、教会の活動に参加してまいりました。バザーの仕分け作業の時には、アイスクリームを差し入れてくださったり、私たちと、いつも一緒にいてくださいました。

正月には毎年、教会へおせち料理や鍋物などを持ち込み、新年会をしておりました。その折の司教様の嬉しそうな顔を懐かしく思い出します。あみだくじが大好きで、お抹茶を振舞って下さったり、ライオン歯磨きの歌を歌って下さったり、本当に楽しい新年会でした。病人のお見舞い、家庭ミサ、食事会など、お優しい司教様と、ご一緒させていただき、感謝致しております。

司教様が天国に召されてから、十二年になります。私たちは本当に悲しく淋しい思いを致しました

が、今でも、司教様のお言葉が、私たちを癒してくださいています。人に誤解され、言葉で傷つき、心も肉体も傷ついた時、司教様は私たちに「人を裁くことが出来るのは神様だけです。神を信じ、お祈りをし、感謝をして、天使の心を持てばいい」とおっしゃって、ご指導してくださいました。

大きなお体で、いつも微笑んでいられた司教様は、弱く小さな人々、苦しんでいる人々を特に愛され、豊かなお恵みをお与えになりました。世界中の人々、また名古屋教区の人々を愛してくださいました。天国の相馬司教様に心より愛をこめて感謝致します。

最後に、アロイジオ賞を創設してくださいました野村司教様に感謝を申し上げます。



眩きの祈り

フランシスコ・ザベリオ 川崎 民茂

人生は、出会いと別れのくり返し。その中で、学び、成長し、生きる力を養い、貯えるものであろうか。

予期せぬ出会いが、入信という、人生の一代転機をもたらし、父の死によって、生きる支えを無くし、空しさに落ち込み、人生の目標を見失ってしまう。



今、また身内の病によって、苦悩している。何が私に出来るのか、解らない。ただ、生きる力が欲しいと、暗中模索している。弱い自分、未熟な自分を、如何に受け容れたらいいのか。神を信頼し、神に希望を持ち、具体的に、どうすればいいのか。祈りなさい、ただ祈りなさい、そして、神の来臨を待ち望みなさい。

心の光

マリア・ベルナデッタ 山本 千恵子

新しい命を与えられる。一人一人の小さな光が集まって、私たちの共同体に、愛の行いが広まり、全地を照らされる。

私たち一人一人は、神様がお選びになった。

小学校の時、日曜学校で歌った。「私は小さい火、光りましょう 悪魔がふいても光りましょう」

御復活祭は新しい命を、再びいただくように、イエス様からのメッセージは何なのか、



一人一人が光の子となって、完全になるのはむずかしいが、完全に近くなるよう、努力すること。

若い人も、年を取った人も、光の子となって復活する。罪も許され、新しい命を与えられる。

すばらしいこと小さくてもいい、光を照らそう 明るい心の光を。

「三年日記」考

マリア・マグダレナ 城野 道代

今年の四月から新しい医療制度の中で私達は後期高齢者と呼ばれるらしい。その私が三年日記なるものをつけ出して、二年近く経過した。

最初の年にはさすがに空欄の日が多い。だが、〇六年四月から始めた理由の一つとして、復活祭に牧野神父様から堅信の秘蹟を受けたことがある。この間の事情は、「みこころ第五号に「五十六年目の堅信」として駄文をのせていた。自分史的なものを残すつもりはない私は、城北橋教会に所属していたあかしくもなり、慰めとして充分である。

元来、日記類は苦手で、小学生の頃は夏休みの宿題日記に苦しんだ記憶が残っている。

そんな私だが記憶の方があやしくなると、記録が必要となった。そして今年も閏年でもある。残

りの人生にあと何回閏年に出会えるか予想はつかない。

この一冊でさえ完了するか、あるいは来年の春、再び本屋で日記を物色することになるか、すべては神の思召し次第である。

ところで今年は四年に一度の閏年で、北京でオリンピックがある。ちなみに古語事典によれば、もともと日本には漢語の「閏（じゅん）」の読みの観念がなく、「潤（うる）」を転用したらしい。陰暦で約五年に二度、十九年に七度の閏月を設け、一年を十三ヶ月としてその月を「のちの月」と呼んだとのことである。

三年日記の効用の一つに気温の変化が比較できる。地球温暖化の故か、世界中の気候が急に変化してきた。二〇〇七年四月一日、枝の主日は、黄砂がひどく終日曇り日だった。その夏は異常に暑く連日三十度を越したと記入してある。今年の二〇〇八年の春一番は、日本海沿いの富山から東北にかけて突風が吹き、高潮の被害も出た。それで最近、最高、最低の気温を

翌日の新聞を見て転記している。「何事にも時があり天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」とコレヘトの言葉三十一にある。

今年の復活祭は桜も満開に近い頃ともなろう。東門の近くの、聖母像の上のつるばらは蕾を持ち上げ、その上の高いユーカリは、風に揺らぎ、葉はさらさらと音を立てる。

オーストラリアからコアラの食べない樹種を選んで植えて下さった神父様達のところへ、千の風となつて運んで行くのであろう。感謝のうちに、アレルヤ！



名古屋に来て十年

フランシスコ 中ノ瀬 豊秋

二〇〇八年、城北橋教会で迎える十度目の春が来ます。一九九八年四月、転勤により、長崎から名古屋に来ました。前もって調べていた教会へ、バスに乗り、日曜日に初めて、教会の門をくぐりました。

最初に目に映った大きな桜の木に驚いた記憶が、今でも残っています。広い庭も印象的でした。お御堂は二階にありました。静かな空間がそこにはあり、ほっとしている自分がいました。

毎週の日曜日のミサには、以前からあずかつてはいましたが、幼児洗礼を受けたせいなのか、格段の準備もなく、毎週教会へ行っていました。しかし、転勤により、単身生活が始まり、慣れない環境や、職場の人間関係など、かなりストレスが多くなっていました。そんな時、前は当たり前のように教会の椅子に座り、説教を聴い

て、家路についたのに、城北橋教会に来て、新鮮な感覚を味わいました。

一週間に一度、顔を合わす兄弟姉妹の皆さんが、私の支えとなっていて、気づくのに、時間はあまりかかりませんでした。会社以外では、話す人もいない日常生活にあつて、唯一会話を楽しむ機会を教会で得ました。その時ほど自分がカトリック信者で良かったと実感しました。

毎週日曜日が来るのを楽しみに生活できました。さらに出身が長崎との事で、特に親切にしていた方々には、感謝をしながら、毎日を過ごさせていただきました。特に平川さん、笹野さん、山田さん、水口さん達に、この場を借りてお礼を言いたいです。そして、もう一人、意外な友人がいる事にも気づきました。実はその人を、以前から知っておりまして。五年近くも、私の身近にいる人で、イエス様でした。

この友人は、とても出来た人で、私の愚痴や文句を黙って聞いてくれ、たまに思い出す程度なんです

が、長年友人を続けてくれる、ありがたい存在です。仕事で落ち込んでいた時、相談に乗ってくれて助けてもらいました。

二〇〇六年夏、妻と猫（ミー、十五歳）が名古屋に来て、私の単身生活も終わりを告げ、家族水入らずの生活をしています。

最後に、これからも城北橋教会の兄弟姉妹の皆さんや、プリヨ神父様、イエス様とお付き合いです。でもらいたい、勝手に思っていますので、よろしくお願い致します。



不思議発見シリーズ⑤

ヤコブ 後藤 明憲

ご復活祭を迎えますと、牧野神父様に代父をしていただき、クワーク神父様から洗礼を受けた時のことを思い出します。その当時の私は、イエスの聖心に捧げられた教会にもかかわらず、聖信心心業のことを全く知らなかったのです。イエス様のご像に違和感を抱いておりました。それはご像の胸に茨で囲まれ、炎に包まれ、真っ赤な血の色の心臓が描かれていたからです。聖書で学んだご降誕から、ご昇天というイエス様のご生涯と結び付け様が無い不思議なご像に思えたからなのです。みこころ教会が大好きだった私ですが、このご像は不思議というより、異様な感じに思え、初金のごミサにも与ったこともなく、祈るときはずっと聖心の聖母像の前でした。

このイエスの聖心という信心は、聖マルガリタ・マリアにご出現されるずっと前からありました。中世では、写本による聖書しかあり

ませんでしたので、ステンドグラスに描かれた聖画や受難劇を通して、イエス様を学ぶことが多かったようです。人々は十字架上のイエス様が脇腹を槍で刺し貫かれた時に、その槍は心臓まで達していたと感じたのでしょうか、その傷ついた心臓を、炎のように燃え上がる私たちへの愛の印として、神様のみ心として表現したのです。考えて見れば、見ることが出来ない人の心を表現するのに、心臓を描くのはどの時代、どの地域でもありました。しかし、キューピットの矢ではなく、槍で刺し貫かれた血だらけの、むごたらしい心臓だったからでしょうか、当時の私は、感覚的に拒否をしてしまったのです。旧約の時代から、人は何度も、何度も神様を裏切りますが、最後には、神様はとうとう人となられ、十字架の死に至るまで、人に仕えられたのです。イエスの聖心は、神様の無限の愛を象徴するものがあり、崇敬の対象となっていたのは、ごく自然なことだったので

す。

十七世紀の後半、フランスのブルゴーニュ地方にあるパレルモニ

アル修道院で、聖マルガリタ・マリア・アラコク（一六四七―一六九〇）にイエス様のご出現なさると、この信心業はさらに盛んになったのです。イエス様は彼女にご受難の傷をお示しになり、自分の愛に応える人が少ないと嘆かれ、九ヶ月間続けて第一金曜日に償いの心を持つてミサに与れば、特別な恵みを与えると約束されました。初金の信心業はこの啓示から始まったのです。イエスの聖心のご像は、聖マルガリタ・マリアに現れたイエス様のお姿なのです。聖マルガリタ・マリアはお告げを受け、熱心に、イエスの聖心の限りない愛に応え、傷だらけになるまで、神と人を愛することが出来るように、またキリストの聖体後、八日目の金曜日をイエスのみ心の祭日として制定して欲しいという運動を始められました。

聖女への啓示があつた約二〇〇年後の一八五六年、ピオ九世はイエスの聖心の祭日を定められました。教会はご復活後四十日目の木曜日に主の昇天（現在は直後の日曜日に移動）、五十日目の日曜日に聖霊降臨、次の日曜日に三位一

体、その週の木曜日にキリストの聖体（現在は直後の日曜日に移動）を祝います。ですから、現在はキリストの聖体直後の金曜日にイエスの聖心の祭日を祝うのです。翌日の土曜日は聖母のみ心の記念日で、常にイエスの心と結びついていた聖母の心を祝い、聖母の生き方に倣うように心がけるのです。



六月は聖心の月と言われているが、今年のご復活祭が早かったので、五月三十日（金）がイエスのみ心の祭日となります。聖心布教会や聖心の聖母会では、翌三十一日（土）を修道会固有の祝日として、聖心の聖母を称え、祝います。一八五四年に聖心布教会を創立されましたシユヴァリエ神父にも、創立後の色々な苦難による「靈魂の暗夜」といわれる時期があり、その間三ヶ所の巡礼をされました。アルス村に聖ビアンネを、ローマにピオ九世を、一八五九年の冬に、パレルモニアルに聖マルガリタ・マリア（一八六四年列福、一九二〇年列聖）を訪問されたのです。そこでご出現のあった聖堂でミサを捧げ、聖女の遺体の前で熱心に祈られたのです。シユヴァリエ神父は聖心の限らない愛で、癒されたのでしよう、この巡礼を境に、苦しみ、悩みから解放されたれ、ご自分と同じように、世界中の人々がイエスの聖心を愛するようにと、改めて決意されたのです。

芸術

『ベースの魅力に惹かれて』

～ アントニオ 中嶋 順二さん ～

最近、聖体拝領後に歌われる英語の賛美歌に、ボン、ボン、ボンと低い音が加わってきたことに気づいた人も多いだろう。中嶋順二さんのウッド・ベースだ。女性コーラス陣の圧力を一人で支えていたギターの山田裕二郎さんが、ついにSOSを発したのが発端らしい。通常の演奏ではクラシックは弓で弾き、ジャズでは指で弾く。中嶋さんは、学生時代からロックバンドの一員であった。大音響のロックであれば、エレキ・ベースなのだが、エルビス・プレスリーに代表される初期のロックでは、ジャズと同じように、ウッド・ベースを使っていた。スイングジャズも好きだったと言う中嶋さんは、就職直後に、エレキではなく背丈ほどもある大きなウッド・ベースをローンで購入したようだ。



もちろん、ベースの音を、アンプを通して出すために、振動音を拾う装置も内部に取りつけたので、何ヶ月分もの給与に匹敵する値段になってしまったと、笑いながら話をしてくれた。ベースは太い四本の弦を指で弾いて音を出すのだが、大きな音を出すためなのか、弦が高く張ってある。そのため、弦を左手の指で抑えるのに、相当な指の力がある上、また右手の指で、その太い弦を引っかけるのだから、中嶋さんの指先には、タコが出来て硬くなっていた。

ロックバンドでは、ボーカルやギターほど目立たないが、ベースは和音を決め、リズムを刻むというパーツなので、バンドを支え、能力を引き出すという地味ではあるが、重要な役割を持っている。ベースの魅力に惹かれたのは、そうした素朴で、安定感だったのだろうが、中嶋さんらしい選択だったと、話を聴きながら納得した。後で聞いた話だが、ドラムはロマンチスト、ギタリストはエゴイスト、ボーカルはナルシスト、そしてベースはニヒリストという笑い話があるそうだが、素晴らしい奥さんと優太君に恵まれた今の中嶋さんは、家庭を支える優しい父親である。賛美歌の伴奏をするのは初めての経験なので戸惑いがあると言っていたが、ジャズっぽい4ビートの賛美歌もレパートリーに加わってくるのではないかと予想をしているのだが……。年期の入った傷だらけの愛用楽器で、これからも女性コーラス陣の後方で、聖歌隊を支えていって欲しい。

（文責・後藤明憲）

Sr.林が城北橋教会の皆さんにインタビュー 第三回 「城北橋教会・新成人にインタビュー」

『これはわたしの愛する子、私の心に適う者』

一月十四日、成人のお祝い日にふさわしい福音が読まれました。それは「主の洗礼」場面で、イエスが親元を離れ、洗礼を受け四十日間の荒野での生活後、公生活に入るターニングポイントであります。城北橋教会でも九名の新成人が誕生し、一月一日・六日に信仰の更新と祝福が行われました。今回は、新成人インタビューに答应てくれた水野麻衣子さん、山本光太郎さん、高木のぞみさん、松山賀子さんの声をご紹介します。

成人の日を迎え、率直な今の気持ちを聞かせてください。

水野 正直、学生という立場は変わったという実感がわきません。税金の支払い請求くらいかな(笑) それにまだ大人の女性としての扱いを受けてないので…これからは「麻衣子さん」と呼んでもらおうかな(笑)

山本 来名した時は十九歳、今何が変わったかは思いつきませんが、実感もわきません。この教会では色々なことを頼まれ嬉しいです。働き始めたら社会的な責任とか出てくるのかもしれないが今は分りません。

高木 正直、そんなに変わったという点はありませんし、意識していないですが、思い返せば二十年長かったなあと思います。最近では家族関係、仕事(アルバイト) 友人関係が良く、満たされている感じがします。それはきっと小さな幸せに気付いているのかもしれない。

松山 一番思ったのが、大人の仲間入りをしたなということです。もう甘えは効かない、親に保護されてきたけど、今度は自分の足で歩き、自分でガードを作りながら色々なことに挑戦したいと思います。

山本 一番思ったのが、大人の仲間入りをしたなということです。もう甘えは効かない、親に保護されてきたけど、今度は自分の足で歩き、自分でガードを作りながら色々なことに挑戦したいと思います。



大人の信仰者として、これからの人生の抱負を聞かせてください。

水野 教会関係は変わらないだろうな…。日曜学校で子供たちと接するようになって、それまで子供の目線でものを見ていたのが、世話をすることで大人の視点も入って来て、今は両方の立場に立っている感じがします。リーダーとして子供たちに願うことは、教会が楽しく、いつも行きたい！と思えるところであってほしいということ。だから他のリーダーと共に、そういう場所づくりをまたそういう教会を作りたいと思う子供を増やすことが目標です。それが子供たちにしてあげられることかなと思います。

山本 基本スタンスは同じだと思えます。つまり迷惑をかけず、頼まれて期待に応えられるようにに在ること。それは自分のためというより他の人のため。学校でも教会でも、誰かのために手伝いたいと思いません。僕は、リーダーシップを取るといふタイプではなくサポート役が向いているのでは

山本 基本スタンスは同じだと思えます。つまり迷惑をかけず、頼まれて期待に応えられるようにに在ること。それは自分のためというより他の人のため。学校でも教会でも、誰かのために手伝いたいと思いません。僕は、リーダーシップを取るといふタイプではなくサポート役が向いているのでは

松山

子供と成長していききたいです。それにはまず自分が笑顔になることが大切だと思うのです。それにはまず自分が笑顔になれるだけで自分が幸せになれる。すごい、その人が笑ってくれてくれるだけで自分が笑顔になる。それが大切だと思うのです。子供と成長していききたいです。



高木

ないかと思えます。だから縁の下の力持ちな存在になりたいと思えます。

「自己のある人間・信念のぶれない人間になるう」です。去年は、人間関係など様々なことですごく揺さぶられたし、どん底でした。でもその中でぶれなかったのは信仰でした。こんなときだから教会に行き、日曜学校の子供たちと関わって、彼らの笑顔で救われました。人生の抱負：ここはキーポイントね(笑) 私の人生の九十%が社交ダンスで占めている。社交ダンス馬鹿ですが、これは高校生の時始めてから唯一私が続けてきたものであり、誇れるものだし大好きなもので、これからも続けていきたいらいいなと思えます。私がモットーにしていることは、「見ている人を笑顔にさせるダンス」です。人の笑顔ってすごい、その人が笑ってくれてくれるだけで自分が幸せになれる。それにはまず自分が笑顔になることが大切だと思うのです。子供と成長していききたいです。

長女キラは四歳です。ということは母親歴も四年、子供と共に成長したいです。でも子供が年をとったら、逆に若くになりたいな(笑) 私の夢は、できれば学校に行き直して、将来保育か介護の仕事に携わることです。実は過去に、福祉の学校に合格したにもかかわらず行きそびれた経験があります。だからもう一度やりたいと思えます。

これから社会の中で生きていくときっと多くの困難にぶつかるとは甘くない現実の中でイエスと共に生きることができるとは、希望を持って生きることができるとは、あなたが、普段の生活の中でどんな時に神、聖霊あるいはイエスを感じますか？

水野 (普段の生活の中で) キリスト者として「幸せ」と感じることはあまりないけど、辛いとき、困難な時にすがってしまい、その時「恵み」に気づかされることならあります。幸せな時って忘れがちになつていきます。健康面が特に大きなことかもしれません。成人を祖母に見守られながら迎えられることは一番大きかったです。実は以前から祖母が人に「麻衣子が成人するまで見守られるかな」とこぼしていたことを聞いていました。わたしにとってこれは一番嬉しかった。ここ数年祖母の健康状態はあまり思わしくなかった。成人の日を迎えた時に祖母の健康が随分回復してくれたこと、これが一番感謝している事です。

山本

ご飯食へる時に感謝するとか：平日は何も考えてなく、日曜日は普通に教会に来ていてという感じです。中・高と教会を離れていたし、教会に友人がいなかったし：少し楽しいことがあったら、これも導きかなと思ったり？あまり考えたことないですね。

高木

視覚的に感じた事は、小学生頃のクリスマスミサに参加した時のこと、御堂のステンドグラスが水に揺れるような感じで揺れてそれが祭壇に広がるように見えたのです。隣にいる母に尋ねたら「きつと神様が降りてきたんだよ」と優しく言われ私も素直にそう受け取った記憶があります。また、高校一年生の春に自転車に乗っていたとき、車にはねられかなり飛ばされました。鎖骨骨折したものの顔や他はほとんど傷つかず、代わりに自転車のハンドルがぐにゃと曲がったのです。この時、ああ私は生かされてるなあと思えました。普段の生活では、辛い時になると家で祈ったりしますが、ミサに行った方が

松山

より「支えられてる」と感じます。神に対してどうしてほしい、こうしてほしいと思うのではなく、苦しい時でも常に支えてくれる感じがします。だから踏ん張れる。お腹に子供を宿したとき、無事に子供が生まれてきますよ。うにと、また夫や両親のことを毎日朝晩祈りました。いつも祈りますが、この時は特に強く祈りました。そして、無事に子供が生まれた時、神様が見守ってくれたのだと思います。生まれてきてからは、もっぱら子どものことをお祈りしています。私の家には小さな祭壇のような祈る場所が作っており、それに向かって祈るのです。すると子供も真似てぶつぶつ言いながら祈ります。夫も宗教とは無縁の環境にいましたが、だんだん興味を持つて色々と聞いてくるようになり、仕事休みの時など、教会と一緒に祈ってくれたり、子供の誕生会を教会でやらせてもらう時でも、積極的に関わってくれました。夫がこのように興味を持つてく

れることは嬉しいのです。

信仰は一人で育むのは難しいです。しかし神に呼び集められたもの同士でお互いの持ち物やタレントを持ち寄り、共に祈るならきっとお互いの信仰生活を支えることができるでしょう。あなたは教会という信仰共同体でどんなパートを担えると思いますか？また支えられていると感じた事はありますか？

水野 子供と接したいと思うこと、子供の成長を見ることが、教会に慣れていく姿を見ることが、これが私の癒しにもなっている。教会での仕事というよりは、自分も一緒に楽しみたいと思うことをやっています。好きだから続けられると思います。

山本

とりあえず今は、教会でオルガンを弾かせてもらっていることくらいでしょうか。これは自分がやりたいからというよりやらせてもらっているという感じです。まだ役割を担うという立場ではないと思うのです。そういうことを意識せずに行っているかもしれません。

高木

一般的なことを言うと、自分の能力としてここぞという時に根拠のない自信が湧いてきて、またそれに支えられてきたということですね。例えば受験の時など直前まで不安だったのに、試験会場に入る瞬間力が湧いたり。人間的なことで言うならば、人を笑顔にさせられるところ。みんなを笑顔にしたいと努力することによって自分も力をもらうのです。サポートされてるなど感じる時は、いつもです。特に母に支えられてきたと感じます。これは最近気づいたことなんですけどね(笑) また、最近父のことも認められるようになり、関係がいいです。自分で言うのもなんですが、この明るい性格で、色々な人と話し、人を笑顔にできることが私の得意なことだと思えます。実は出会った人出会った人皆、私に相談を持ちかけてくるのです。家族を寝かしつけてから夜相談に乗るのですが、皆「賀子はよく相談に乗ってくれるけど、賀子自身に悩んでいることがあったら

松山

言つて」と言われます。でも、悩むことと言つてもね…たぶん私は相談を聞くことが好きなのかもしれません。また、子育てがこのようにできるのは、夫のお陰だと思うし、日曜日に教会に来るのは両親の協力があつてこそです。それに、たまにしか教会に来ない私に変わらず接してくれる教会の仲間や信者さんに助けられていると感じます。



言つて」と言われます。でも、悩むことと言つてもね…たぶん私は相談を聞くことが好きなのかもしれません。また、子育てがこのようにできるのは、夫のお陰だと思うし、日曜日に教会に来るのは両親の協力があつてこそです。それに、たまにしか教会に来ない私に変わらず接してくれる教会の仲間や信者さんに助けられていると感じます。

教会は本来お互いを祈りと行動で支え合う共同体のはずですが、現実にはなかなかうまくいきません。特に人間関係は面倒なことがたくさんあります。皆さんはこれから教会を担っていくものとしてどんな教会を築きたいですか？理想の教会像を語ってください。

水野 私は、城北橋教会が好きです。

「城北橋教会はアットホームだね」という感想をよく聞きますが、私もそう思います。家族ぐるみで付き合っているからでしょうか。このままであつてほしいなと思います。自分の子供にも今と同じような感じの教会に連れて行きたいし、ずっとこんな教会であつてほしい。日曜日に教会にこれば、(血縁の)家族でなくても声をかけてくれます。特に「おばあちゃん、今日どうしたの？」と。月に一回くらい恵利(妹)のことも聞かれる(笑)また家族のように祝ったり優しくしてくれ、お互いが必要としているし、心配もする。目立った争いもない感じで、私は今の教会が好きです。

山本

城北橋教会は子供も大人も楽しそうに見えます。教会組織のこととかはまだまだよく分りませんが、僕の出身教会である金沢教会は保守的な感じでした。それに比べ城北橋はアットホームで明るい感じがします。それに僕がひとり暮らしをしているということでも色々なものをくれたり「お世話話」してくれる人が多いと感じました。だからといって深くは干渉してない感じですが、人はそれぞれ色々あるし、全ての人にこれがいいと思うかは分りませんが、それでもお互いにしゃべらないよりはいいと思います。この教会はみんながみんなお互いを知っている人のような感じがします。実は僕に声をかけてくれる人の半数は名前を知りません(笑)僕は口下手なので積極的に話しかけることはあまりありませんが、こうして話しかけられることは嫌ではありません。

高木

今の教会をとてても気に入っています。何が気に入っているかという、温かさかな。教

松山

会に通っているうちに自分の居場所ができて、他の信者さんが声をかけてくれるからです。人は必要とされている事が「生きていく」と感じる時ではないでしょうか。それにその人の居場所があることは良いことです。事情でたまに教会に行く人にも居場所がある、皆が平等に必要とされる場所であつてほしいと思います。教会に来る人に教会の仕事が偏ってしまうのはいけません。かといって信者全員に教会へ強制的に来させるのもおかしいと思います。それにしても、強制でないのに毎週教会に来る信者さんはすごいと思います。きっとその人たちには教会に居場所があり、必要とされている、生きていく実感があるから来れるのだと思います。

い人でも神様の前に立つたら皆同じです。だから、どんな人でも同じように対応していきたいと思います。

今回インタビューに応じてくれた新成人たちは、それぞれの立ち立場で素直に信仰体験やプライベートなことで語ってくれた。それぞれの環境の中でそれぞれに生きる信仰のあり様の中に神の働きを強く感じると共に、未来の教会への大きな希望を期待させる。様々な人間的・社会的困難を前に神に頼る勇氣さえ失われそうになる時でも、彼らが共通して感じるという「教会の温かさ、アットホーム」は城北橋教会という信仰共同体の底力と神の慈悲深い愛の力を思い出させるであろう。
新成人おめでとうございます！



信者動向

二〇〇七年十二月〜

【転出】 ようこそ

布池教会から

マリア 市川真里佳

【転出】 お元気で

日本聖公会中部地区名古屋マルコ教会へ

クララ 服部 智子

【洗礼】 おめでとうございます

十二月二五日

マリア 今枝よしゑ

【結婚】 お幸せに

二月九日

マリア 藤岡 利章
市川真里佳

教会行事予定

二〇〇八年四月〜八月

■三月二三日(日)

復活祭の主日 祭

■四月十三日(日)

教会委員会(新旧役員合同)

■四月二十日(日)

城北橋教会 総会

■五月四日(日)

こどもの日 祝別

■五月十一日(日)

インターナショナルミサ

■五月十八日(日)

教会委員会

■五月二五日(日)

キリストの聖体・初聖体

■六月十五日(日)

みこころバザー

■六月十五日(日)

教会委員会

■七月二十日(日)

教会委員会

■八月十日(日)

城北橋合同慰霊祭

■八月十五日(金)

聖母の被昇天 祭

※教会行事については、他の行事の兼ね合い等に変更されることがありますので、あらかじめご了承下さい。

編集後記

■主のご復活おめでとうございます。今回の「みこころ」では、四ページにわたって、シスター林が城北橋教会の新成人たちにいろいろとインタビューしてくれたものをまとめて頂きました。

他の小教区ではなかなかこういったインタビューをするのは難しいですが、とても新成人らしい、また城北橋共同体のあたたかきを感じる貴重なインタビュー記事となりました。シスターありがとうございました。

話は変わり、今年の復活祭は三月二十三日ということで、移動祝日である復活祭の中では早いお祝いとなりました。何が言いたいかというと、ついこの間「クリスマス号」を作成したばかりなのに、もう「復活祭号!」ということ、復活祭まで一週間を切っているというのに未だに編集が終わっていない始末(笑)。

こんな感じで結局、毎回発行日ギリギリまでこんなことをやっているわけですが、このスタイルではじめて「みこころ」も早いもので、おかげ様で次号は第十号を迎えます。

今年、十一月に長崎で一八八殉教者の列福式も行われますし、その関連行事等も名古屋でたくさん行われていますので、そのような行事に参加された方のレポートもたくさんお寄せいただけたら、編集がもう一週間早く終わるかな? (笑) と思いますので、次号もたくさんのお寄せお待ちしています! (片岡)

■次号の発行は、**八月十五日(聖母の被昇天祭)**頃の発行を予定しています。次回もたくさんのお寄せをお待ちしています。